Black Rose -黒の継承者-

亞人子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｂｌａｃｋ　Ｒｏｓｅ　－黒の継承者－

【Ｎコード】
Ｎ０５２４Ｅ

【作者名】
亞人子

【あらすじ】
超一流金持ち学院、黒椿学院に唯一の特待生として入学して来た圭（ケイ）。しかしとある日何か変な黒猫に出会いー？イタリアの超一流マフィアの次期ボスとしての教育の日々が始まるー

標的００　黒猫の鳴き声（前書き）

STORY　1　PARRT　1

標的００　黒猫の鳴き声

イタリア―シチリア島
その美しい島の裏に、大きな城が建っていた。ただの城じゃ無さそうだ。
城の周りには気配を消して何かを守護している人達が何かを待っているようだった。
ある、城の一室で誰かが何か話していた。
「……じゃあ、俺は日本へ行けば良いんだな？」
「あぁ、そうしてくれ。……くれぐれもあの件は内密に頼む。」
「任せておけ。これでも口は堅い方なんでな。」
「頼むぞ……ネロ……！」

＊　＊　＊　＊　＊

図書館の扉を少し開けてみた。
「　……。」
その瞬間に誰にも気付かれない様に扉を閉めて、蝶の羽ばたきの様な溜息を零した。
５つもの図書館があるのに、なぜ全て騒がしいんだろう。
眼鏡の奥で落胆の表情を浮かべると、１階に降りる階段の方を向いた。
「静かな場所ってないのかなぁ……。」
諦めながら長い廊下をとぼとぼと歩いていると、何かの鳴き声が微かに聞こえた。
「ニャゥ……」
あまりにも場違いな声に少し驚き、その場に立ち止まった。
「ニャゥウ……」

再び同じ鳴き声が聞こえた。3階へ行く階段の方から聞こえる。なぜだか勝手に身体が階段の方に向かった。段々と鳴き声が近くなって来ている。階段を上ると、人気の無い3階校舎に辿り着いた。異様な静けさが辺りを漂っている。

「ミャゥ……」

角を曲がった所にある教室の中からさっきの鳴き声が聞こえた。

「使ってない応接室……？」

応接室のドアノブを握り、思い切って静かに開けた。

すると、綺麗な広い空間の中央に黒猫の後ろ姿が見えた。あれだろうか？

「ね、猫？」

ゆっくり一歩一歩猫に近づくと黒猫が振り返り、上目目線でこっちを見上げた。

すると、猫の口が開いた。

「お前か、黒椿学院唯一の特待生、朽木圭って言うのは。」

「は……はぃ？」

正直言って、幻覚に陥っているのかと思った。黒猫が口を聞いたのだ。

「オレはネロ。イタリアから来たヒットマンだ。」

「は……はぁぁ？！」

ーこの時、既に運命の歯車が動いてしまっていたかもしれない

標的００　謎の赤ん坊（前書き）

STORY　1　PARRT　2

標的００　謎の赤ん坊

「オレはネロ。イタリアから来たヒットマンだ。」
黒猫が口を聞いた。考え理解出来るはずが無い。
「ね、猫が……？」
「ん？　どーかしたか？」
ネロは幼稚な声で大人びた言葉を発している。矛盾し過ぎだ。
圭が驚いて腰を抜かしているのを見て、ネロは気がついた。
「あぁ、安心しろ。この姿はあくまでも“仮”の姿だからな。本当はちゃんとした人間だ。」
そう言うと、ネロは目を瞑った。圭は腰を下ろしながらその様子を見ていた。
すると、途端にネロの周りに霧の様なものが漂い、姿が見えなくなった。
「な、何だ……これ……？」
圭の前には保育園児並みの幼児が腰を下ろしていた。
「これも仮の姿だがな。」
圭は眼鏡のレンズを擦り、ネロがよく見える様にした。確かに声はそのまんまだ。
「さて、本題に入るぞ。お前マフィアって聞いた事あるか。」
ネロの出現に圭は少し動揺しながら答えた。
「あの……秘密組織とか、暗殺部隊とか？」
「まぁ、そんなとこだな。」
ネロはふっと鼻で笑い、後ろを向きそのまま歩き始めた。
「……自分に何の用なの？」
呆れながら圭は聞いてみた。なぜ子供がこの学院にいるんだろう。
「フン。」
ネロはその場で立ち止まるとニヤッと笑って振り返った。
「オレはあるイタリアの超一流で最強と唱われるマフィアのヒット

マンでな。お前を教育しに来た。」
圭は微妙な呆れ笑いでネロを見た。ネロは真面目な顔をしている。
「……自分の？」
「あぁ。家庭教師ってヤツだ。」
圭は呆気にとられていた。こんな正体すら分からない幼児が自分の家庭教師？今の時代は赤ん坊でさえ勉強を教えられる様になったのか。
「……嘘？」
ネロは圭の様子を見て鼻で笑うと、圭の頭を何かで叩いた。
「痛っ！　……何するんだよっ。」
圭は意味が分からず、ネロに殴られた部分を手で摩った。そのネロの手には異様に大きく見える受話器が乗っていた。これで叩かれたのだろうか。
「電話してみろ。お前のママンに。」
圭は渋々受話器を受け取って、案外素直に母親に電話をかけた。
母さんが見ず知らずの幼児に家庭教師なんか任せる訳が無い。ましてや雇う程のお金が家にあるとは思えない、と想像しながら圭はネロが居る方向の逆を向いて受話器を右耳に近づけた。
「もしもしー『あっ！　圭ちゃん？』」
無駄に元気な女の声がした。母親だ。
「母さん……。矢鱈に今日は機嫌良いね。良い事でもあったの？」
圭は少し呆れながら聞いていた。どうせスーパーで大安売りかなんかでもあったんだろう。
『あのね、聞いて！　圭ちゃんに家庭教師さんが付く事になったのよぉ～！』
「は？」
圭は首だけ動かしネロを見た。ネロはこっちを見ながら余裕と自信の笑みを見せている。
「で、でも母さん、家庭教師雇う程のお金って……？」
『それがね、家で暮らせて貰えるんなら無料で教えてくれるそうな

の。良かったわね～圭ちゃん！　これで心置きなく圭ちゃんの勉強の事を考えなくて済むわぁ～』
「……。」
あれほどお金に関する事柄には五月蝿い母親を手懐けるなんて。しかし、まだその家庭教師がネロと決まった訳ではない。再度挑戦するチャンスはある。
「……で、どんな人だったの？　その人。」
圭は背後でコーヒーを飲みながらソファで寛いでいるネロじゃない事を祈りつつ、受話器越しの母親の声に耳を澄ました。
『そうねぇ～……とっても可愛らしい人だったわ。』
母親は上機嫌に言う。ある意味凄い性質の持ち主だと圭は妙に呆れた。
「……身長はどれ位だった？」
まずはそこから挑戦してみた。圭は一応ネロの身長を確認した。ネロは圭の膝下位の身長だ。
『う～ん……母さんの膝位だったかしらね。ずいぶんと可愛らしいサイズだったわ～。』
母親で膝位なら、自分では膝下位……と考えた圭は、再びネロを見てみた。サイズは一応合ってる訳になる。
「なんか用か？」
ネロはエスプレッソを喉に流すと、圭を優雅に見上げた。
「何にも…。」
圭は眼鏡をくいっとすると、再び母親への質問攻めに戻った。
「……なんか特徴ってあった？」
サイズが合っていたとしても、違う確率もまだあるはず。
『特徴？　……どうだったかしらねぇ？　まだ一回しか会った事無いからあまり覚えてないのよね～。』
「だよね……。」
ひとまず安心した様子を浮かばせた。
『あっ、でも……』

「え、何？」
母親の声を聞きながら圭は、首だけ動かしネロを再び見てみた。
『……可愛いらしい黒い猫耳が付いている帽子をかぶってて、黒い付け尻尾まで付けてたのは覚えてるわぁ～。』
「……。」
『それじゃ圭ちゃん。母さん仕事残ってるから電話切るわね～、バアイバイ。』
ガチャッ！　ツーツーツー……
母親が元気に電話を切った。普通ためらう所を。
それにしても黒い猫耳に黒い尻尾というのは―
「それって、」
受話器を耳から離れさせると共に圭は不真面目に顔を俯かせながら呟いた。
ネロは得意げに鼻で笑った。確かに今も黒い猫耳付き帽子をかぶっているし、尻尾だって付いている。
「どーだ。お前の家庭教師がオレだと信じたか。」
「……。」
圭はその事には触れない様にして一番安全な方法を優先した。
「何の為に自分の家庭教師に？」
ネロは圭の質問を聞くと、何故だか今まで以上にニヤッと笑い、露骨に言った。
「お前をマフィアのボスに教育し直す為だ。決まってんだろ？」
圭はしばらく何が起こったのかさっぱり理解出来なかった。
何？　マフィアだって？
「　えぇー！？」

標的００　家族の為に（前書き）

STORY　1　PARRT　3

標的００　家族の為に

「何の為に自分の家庭教師に？」
「お前をマフィアのボスに教育し直す為だ。決まってんだろ？」
圭は本気で自分の全世界が停止したかと疑った。
「人違い……とか？」
はっきり言って信じられない筈。新手の冗談か何かと受け取った方が圭にとっては手っ取り早い
方法だろう。
ーしかしネロにそんな茶番は通るはずが無い。ネロは大真面目に言った。
「超一流のマフィアだぞ。……標的を間違えるはずがねぇ。」
確かにマフィアは間違えそうに無い。圭は改めて聞いた。
「なんで……自分？」
マフィアとなんて接点がない筈と思っている圭には、今の状況がどうしても理解出来ない。
「知らね。……ボスが直接お前を指名したからな。」
「ボ……ボス？」
「あぁ。グウィードファミリーの９代目だ。名誉な事だぞ？　他にも候補は沢山いたのにな。」
少し頭の中を整理してから、圭はネロを再び見た。こんな幼児が自分をマフィアに？
「…本当に…自分をボスに……？」
ネロはニヤッと笑い、ネロの相棒らしき黒い子猫を撫でた。
「信用してないならこいつを見てからそう言え。」
するとその瞬間ーその黒子猫が一瞬にしてネロの銃と化した。そしてネロはその銃で応接室のカーテンに向けて撃った。
「ーっ！？」
圭の目の前を通過したその豪速弾はネロの狙い通り、一瞬にして高

級なシルクのカーテンをぶち破った。圭はカーテンに空いてしまった大きな穴の心配よりも、銃を学院内に運び入れて良いのだろうかという不安の方が大きかった。
「い…ちょ、ちょっとっ。そんな物学院内に持ち運んだら……。」
すると校内アナウンスが応接室に響いた。
「先程、護衛の為裏門に設置されていたボディガードが全員何者かにより倒されていました。
誰か不審な者を見かけた方は即刻職員の方までご連絡下さい。手掛かりとしては、その不振な者
は幼児だったらしく……」
「やべぇな。」
「は？」
ネロは銃を元の黒い子猫に戻しながらそう口にした。
「さっき学院に入った時、何人か蹴散らして来たからな……。」
「え…じゃあ今の不振な者って……。」
ネロは当然という表情で圭に言った。
「　あぁ、オレだぞ。」
そんなに簡単に言われてもと、圭は呆れ返った。すると、廊下の方から何か慌てた足音が沢山聞こえた。
「まさか警察……？」
「だろうな。」
応接室のすぐ向かい側では何人もの警察官達が辺りを探しまわっていた。ネロは圭の背中に飛び乗り、肩にひょこっと顔を出した。
「お前、自分の心配もしろよ。」
「え？」
圭の眼鏡の奥の瞳が何かを訴えるようだった。
「オレはお前の家庭教師なんだぞ？　お前の家族もろともオレの関係者と見なされるかもしれねぇ。」
ネロを背中にぶら下げたまま、圭は漠然とした。
「自分や母さんは関係無いよっ。証拠だって無いし……。」

ネロはそんな圭の言い訳を無視し、鼻で笑った。
「法を重んじる警察らがそんな言い訳聞くと思うか？　第一、お前は今オレといるじゃねぇか。」
「えぇ？　じゃあどうすれば……。」
圭はボサボサの髪を掻いて、その侭座り込んだ。ネロは圭の背中から軽々飛び降りると、圭の目の前に着地した。
「……やってみるか？」
得意げにニヤっと笑い、ネロが切り出した。圭は髪を掻くのを止め、ずれた眼鏡を元の位置に戻した。
「何を？」
もう半分落胆している圭を前に、ネロはさっきの黒子猫を今度は片方しか無い黒いグローブに変えた。
「お前の秘めたボスの力を……見せてみろっ。」
「……は？」
ネロは黒いグローブを左手にはめると、思いっきり圭の額に左手を押し付けたのだ。

標的００　正反対の自分（前書き）

STORY 1 PARRT 4

標的００　正反対の自分

「圭……お前の力を見せてみろっ！」
ネロはありったけの力で、黒子猫の黒いグローブをはめた左手を圭の額に押し当てた。
「ーッ？！」
準備も何もしなかった圭はその侭、ネロの左手を避ける事が出来ずにその衝撃により倒れてしまった。
ネロは真顔で倒れた圭を見下ろし、黒い子猫を撫でた。
「お前が本当にボスに必要な力があるのか……見せてもらうぞ。」
すると、何事も無かったかの様にムクッと圭が起き上がり、その侭無言で顔を俯かせたまま圭は応接室を出て行った。
３階の廊下にはやはり警官が至る所に配属されていて、逃げ出す所も無かった。二人の警官が圭が出てきた事に気付き、圭に寄って来た。
「すいません、少しお時間を頂いても―「どけ。」」
圭はかなり冷徹な声で警官を退かした。しかし、その様子を見ていた警官二人が更に圭の肩を掴んだ。
「君、ちょっと話があるんだが―「どけ。」」
圭は警官の手を振り解き、階段の方へ歩き出した。さっきとはまるで別人である。警官は圭を追い、直ぐに５人位で圭を取り囲んでしまった。
「君！　大人しくしないかっ。少し一緒に来てもらうぞ。」
一番勇気がありそうな警官が言った。すると、圭は顔を俯かせたまま言った。
「警官…」
声は正しく圭のものだったが、雰囲気はまるで正反対の様だ。

さっきの勇気のある警官は動揺せずにきっぱりとした態度で言った。
「なんだ？　一緒に来てもらうぞ。」
圭の後ろにいた警官が圭の腕を掴もうとした、その時。
「邪魔……。」
そう言うと圭は、その警官を逆に掴もうとした手で思いっきり瞬発的に殴った。
「何をするんだっ！　やめないか！」
もう一人、あと一人と圭を取り押さえようとする警官達を軽々と倒して行く。残った警官らが応援を頼むと、その3階の廊下に警官が沢山集まってしまった。
圭は疲れを見せてなく、逆に力がだんだんと増しているようだっった。
「この少年を取り押さえよっ！」
警官達の中心核がそう言うと、一斉に圭の方へ走って来た。しかし圭は逃げずにその場でまだ顔を俯かせていた。

＊　＊　＊　＊　＊

最後の一人を軽々と倒すと、圭はフワッと倒れてしまった。その寝顔には、さっきまでの冷徹さが跡形も無く消えていた。
「フン……やるじゃねぇか。」
ネロは圭の隣に立つと、満足そうに鼻で笑った。
「いやぁ、まさかネロさんが我らを倒したなんて……。言ってくれれば良かったのに。」
警備員の一番偉そうな男がネロに深々と会釈した。ネロはその男の方を向いた。
「こっちこそ、無断でやって申し訳ないな。」
「いえいえ、ネロさんだったら大歓迎ですよ。処理は私共にお任せ下さい。」
「…そうか。」

男が去ると、ネロは圭を応接室のソファに運んだ。
「……少し無理があった様だな。無茶し過ぎたか。」
圭の割れている眼鏡を取ると、ネロは圭を見て目を見開いた。スヤスヤ気持ち良さそうに寝ている圭の向かい側に立ち、ニヤッと笑った。
「成程な。…コイツは使えそうだ。」

圭はそんなネロの考えを知らないまま、健やかに寝ていた。

標的００　正反対の自分（後書き）

STORY　1　~　END~

標的０１　記憶の鎖（前書き）

STORY 2 PARRT 1

標的０１　記憶の鎖

「起きろ、朝だぞ。」
「…ん…？」
春らしい風と共に明るい日光が差し込んで来る。圭はゆっくり上半身を起こし、目をこすった。
「ちゃお。」
目の前にネロが立っていた。得意なあの笑みが嫌に似合う。
「あ、あのさ……。何で自分の部屋に居るの？」
「オレはお前の家庭教師だぞ？　朝から晩まで見張っとかなきゃな。」
「……はぁ。」
蝶の羽ばたきの様な溜息を零した。ネロはそれを聞くと黒い子猫を銃に変化させた。
「文句あんのか。」
圭は必死に否定した。ネロはつまんなさそうに銃を元の黒い子猫に戻した。
机の上に置いてある自分の眼鏡を掛け、圭はベッドから出た。
「それにしても…お前の家って本当庶民風だな。」
ネロは机の上に立ち、圭の部屋中を見回しながら言った。
「余計なお世話だよ……。」
圭はベッドの毛布をきちんと畳み、ネロの様子を見て呆れ返った。
そう言えば昨日って何かあった様な…
「圭、お前、昨日の事覚えてるか？」
ネロはいつの間にか机にコーヒーセットを準備していて、エスプレッソを飲みながら唐突に聞いた。
「それ……どこから持って来たの？」
「イタリアからだ。お前も飲むか？　……砂糖は一杯につき3杯が

鉄則だからな。」
「…遠慮しときます……。」
圭はネロに気付かれない様に再び溜息を零し、クシャクシャな髪を適当に手で押さえつけた。
「……昨日のあの一戦で、お前はマフィア確定されたからな。」
ネロは呑気にエスプレッソを口にしている。圭はその言葉に振り向いた。
「え？　…なんて…？」
「お前、昨日何があったのか覚えてねぇのか。」
圭は昨日の事を記憶の鎖を辿りながら思い出した。しかし、一部分が思い出せない。
「まぁ、覚えていないのも無理はねぇ。初めてあの特殊グローブを使ったからな。」
「グ、グローブ？」
「あぁ。……これだ。」
ネロは黒い子猫を昨日の黒い片方しかないグローブに変化させた。
「…あぁ、昨日ネロにそれで額を……。」
圭はふと時計を見た。既に7時５０分を過ぎていた。
「うわぁ。ち、遅刻だぁっ。」
制服が掛かっているハンガーと、登校用鞄を持って部屋の扉を開けかけた。
「あ！　あと、絶対に学院に来ないでよっ。ネロが来たらなんか事件が起こりそうだし…。」
「早く行かねぇとコイツをぶっ放すぞ。」
ネロは黒い子猫を銃に変化させ、圭の方に銃口を向けた。
「言ってきまぁす！」
銃口から弾が出てくる前に、圭は部屋を勢い良く出て行った。ネロはその様子を優雅に見届けると銃口を上の方に向け、原型の黒い子猫に戻した。
「お前のファミリーの奴を早く集めなきゃならねぇからな。」

黒い子猫は眠そうに「みぃ」と鳴き、ネロの頭に乗った。

標的０１　訳アリの編入生（前書き）

STORY　2　PARRT　2

標的０１　訳アリの編入生

学校に着くと、圭はいつもの光景に溜息を零した。
黒椿学院の生徒は殆ど全員、高級車に乗って登校して来るのだ。圭は住む世界が違う事を理解しながらも、呆れて顔を俯かせて自分の教室へ向かった。

「よっ！　圭。」
爽やかな笑顔の少年が挨拶して来た。
「お、おはよう…山歹君。」
少年は爽やかな笑顔のまま「一緒に行こうぜ」と圭を誘い、１ーＣ組に入った。
山歹は唯一圭に熱心に話しかけてくれる人で、その爽やかさが女子にも男子にも大好評だった。
圭は自分の席に着くと、教科書類を机の中に入れて腕を前で組み、顔を伏せた。
前の席の山歹が圭の頭を人差し指でツンと突き、圭はばっと飛び起きた。眼鏡の先には愉快そうな山歹が爽やかに笑んでいた。
「今日転入生が来るらしいぜ。こんな時期に変だよなー。」
「そ、そうだね……。」
ずれた眼鏡を元の位置に戻しながら頷いた。心臓に悪い。
チャイムが鳴ると同時に生徒達はぞろぞろと教室に入り、自分の席に着いていった。そして担任が入って来た。
「おはようございます。……既に知っている人も居ると思いますが、この学級に転入生が来る事になりました。」
先生がその言葉を口にした瞬間、生徒達がざわつき始めた。
「やっぱり本当なのな。転入生って…。」
「うん……。」

圭は腕を前に伸ばしながら山歹に渋々頷いた。本当はもっと寝ていたい。
「で、では。転入生、入って来て下さい。」
少し臆病気味に先生は指示を出した。するとだらだらと教室のドアが開いた。生徒達の目が一斉に開くドアの方へ注いだ。これだけ注目が集まっていたらかえって可愛そうだと圭は思った。
転入生が視界に入った。

＊　＊　＊　＊　＊

上履きの踵を踏んでいて、腰まで降ろされているズボンには髑髏が所々付いた鎖やチェーン。
中に入れてない白いシャツの上に黒い洒落たセーターを着ている。
見事に輝いている銀髪に綺麗な白い肌が異様に引き立つ。
―無愛想な表情の美少年が立っていた。
「えー……イタリアから遥々編入してきた白夜君です。」
先生は転入生に気を使って優しく言っているが、当の本人はそんなの必要ない様だ。
転入生は眉間に皺を寄せながら、無愛想に生徒達を見下している。
「で、では、…白夜君はあの席に座って下さい。」
先生もこの転入生は苦手なのか、異様に臆病に圭の斜め後ろの席を差した。
転入生は何も言わずに周りに居る生徒を睨みつけながら席に向かった。
「（怖いな…ああ言う人がマフィアに相応しいと思うけど……。）」
圭は歩いて来る白夜と目を合わせない様に、自分の足下を見た。
白夜は鞄を肩に掛け、席の方へ歩いていくと圭の所で足が止まった。
圭もその足が止まった事に気は付いたが、ぼーっと机の角を眺めていた。しかし直ぐに白夜は指定された席に向かって歩き出し、座った。

空気が凍ったが、なんとか生徒達のざわめきにより凍解された。
「なんか…お前を睨んでなかったか？　」
圭は山歹が呟いたのに気付き顔を上げ、疑問符を並べた。
「へ…？」
全くと言っていいほど転入生の事を重視していなかった圭は分からなかった。
動体視力と反射神経の良い山歹は「うーん…」としばらく考えて
「だよな。初対面なのに睨まれる理由もねーよな。」
と爽やかな笑みで返し、前を向いた。圭はしばらくきょとんとしていた。
「カッコよくない？　あの転入生…」「ねぇ。なんか帰国子女って素敵〜」「あの無愛想さがまたねー」
女子はとても浮かれている。そんなにも無愛想な転入生が良いのだろうか。
圭はぽーっと無垢な空を見上げた。眼鏡に映る、レンズ越しの空。
「（早く帰って寝たいなぁ……）」
誰にも気付かれない様に溜息を零し、圭はぼーっと雲の流れを見つめていた。

白夜はそんな様子の圭をじーっと観察していた。
「（あれが…例の…。）」
その白夜の瞳には、炎が燃え上がっている様に見えた。

標的０１　呪いの爆炎（前書き）

STORY　2　PARRT　3

標的０１　呪いの爆炎

帰りのホームルームが終了すると、生徒達はそれぞれの行動を始めた。圭も例外なく、さっさと家に帰られる様に帰りの支度をしていた。
「今日はセブンス・スーパーの安売り日だったっけ……？」
そんな事を呟きながら圭は教科書を鞄に入れていった。
「おい。」
後ろから呼ぶ声がした。振り向くと、銀髪の少年が立っていた。
「来い。」
無愛想にそう言い、白夜は教室を出て行った。圭は首を傾げて仕方無く後を追った。
白夜の後を付いて行くと、人気の無い裏庭に着いた。圭はずれた眼鏡元の位置に戻して、白夜に聞いてみた。
「な…何の用…ですか？」
すると白夜は振り返り、圭を無愛想に睨んだ。怖い顔とはまさにこの事だろう。
「テメェ…グウィードファミリーの次期ボス候補なんだってな。」
圭は首を少し傾けて元に戻した。
「それは……って、なんで君が知ってるの…！？」
眼鏡の奥の瞳を大きく見開き、口を丸形に開けた。
「オレが教えたんだぞ。」
圭と白夜の側に立っている木から声がした。その声の正体はネロだった。木からするすると降りて来て、得意げに微笑んだ。
「ちゃお。」
白夜はネロをじーっと無愛想に眺めながら黙っている。圭は溜息を零した。
「…来ないでって言ったのに。」

「お前の次期ボスとしての自覚が無いから、オレは白夜をわざわざイタリアから呼んだんだぞ。」
圭は呆れ返りの複雑な表情を浮かばせた。それでこの少年は来たのか。すると、無愛想ながらも白夜は少し圭とは違う態度でネロに聞いた。
「お前があの噂のヒットマン、ネロか。……コイツを倒したら、本当に俺が次期ボスになれるんだな？」
圭は軽く首を傾げた。これは一体どういう意味なのだろう。
「あぁ、本当だぞ。」
ネロは表情、声にも一切の迷いも無しにきっぱり肯定した。
「え？　……でも自分をボスにするんじゃなかったの？」
ネロは圭の方を向くと、鼻で笑った。
「あぁ。当たり前だろ？　その為にオレは日本に来たんだからな。」
「いや、別に来なくたって良かったんだけど……。」
どうやら圭の言葉はネロの耳まで届かなかったようだ。
するといきなり白夜が殴り掛かって来た。ギリギリ避けられたが、とても速い。
「こんな弱い、どこの馬の骨かも分からねぇ奴にマフィアのボスが継げるかよ。目障りだ……消えろ。」
この人、眼が本気だ…と感じた圭は、ネロを見た。
「知らねぇぞ？　この白夜紺はイタリアでも優秀なヒットマンだからな。下手すりゃ死ぬぞ？」
「死ぬって……。」
確かに少し危ないかもしれないと思った圭は、慎重に2歩後退りした。
すると、白夜はポケットから古めかしい、洒落たライターを取り出した。髑髏が刻まれている。
白夜はそのライターの蓋を開けると、火を出した。しかもただの火では無さそうだった。

「アイツはただの火じゃねぇぞ……呪いの爆炎だ。」
ネロはただならぬ表情で白夜のライターの先にふわっと揺らいでいる火を見つめた。
「呪い？　……あれが？」
「あぁ。あの炎にチビっとでも触れたら最後、一瞬で爆炎が全身を浸食し、灰になるぞ。」
「……。」
「オレも今日、初めて見たんだ。」
圭は少し身じろぎした。なんだってこの様な危険人物が自分の前に居るのだろうか。
白夜はライターの火を、なんと自分の掌に乗せた。メラメラと段々火が大きくなっていっている。
「焦げろッ！　Ｔｈｅ　ｆｌａｍｅ　ｏｆ　ｔｈｅ　ｃｕｒｓｅ！（呪いの爆炎）」
炎を両掌に乗せると、圭に向かって勢い良く炎を投げた。
その炎は勢い良くメラメラと燃えながら、圭に飛びかかった。
「ーッ！？」
圭はなんとか避け、ネロが居る方へ走って行った。このままじゃ本当にー
「ネロ……何とかしてよ！」
「オレはこの戦いに手を出す事は禁じられてるんでな。手助けできねぇんだ。」
ネロは幼く言ったが、圭は走って追って来る白夜を見て冷や汗をかいた。少なくともあっちは本気だ。
「お願いだよ、ネロっ。」
頼み綱が断ち切れようとした時、ネロは頭に乗っている黒い子猫を黒いグローブに変えた。
「んじゃ、お前が自分の為に戦えっ。」
ニヤッとネロは笑うと、勢いを付けて圭の額にグローブをはめている左手を強押した。

圭はその反動で倒れてしまった。

標的０１　争いの真髄（前書き）

STORY　2　PARRT　4

標的０１　争いの真髄

　圭はネロのグローブに当たった反動で倒れた。何も起こらない。
白夜は炎を再び掌に宿すと、倒れている圭の方を見た。
「焦げろッ！　ジ・エンド・オブ、十代目ッ！」
炎をさっきの威力の２倍にして、圭に向かって止めを刺した。もはや避けるのは不可能であった。
爆炎と何かが当たったかのような轟音が鳴り響いた。煙で視界が途絶え、状況が把握できない。
「終わったな」と呟く白夜とは違い、ネロは何かを待ち構えているかの様な表情を浮かばせている。
煙が段々薄れて来て、爆炎投下後の圭の横たわっている姿が伺えると思っていた白夜は目を見開いた。
―薄れる煙の中に居たのは、他の誰でもない…圭本人だったからだ。
圭は顔を俯かせて、何も無かったかの様に立っている。ある意味幻想的である。
「ば、ばかな……！　俺の爆炎は命中したはず―「ふん、分かってねぇな。」」
ネロはそれだけ呟くと、圭を見て鼻で笑った。
白夜は歯軋りすると、再びさっきの２倍の炎を無理に出した。もう体力の限界が迫って来ている。
「くそッ……！　爆炎っ！」
ただ平然と立っている圭に再び攻撃を仕掛けた。しかし、炎は途中までしか進まず、白夜の近くでボウッと燃えた。
体力の限界が来ている白夜の周りに呪いの爆炎の渦が巻いた。逃げる事は……不可能だった。
「ジ・エンド・オブ……俺？」
すると、驚く所に上から圭が降りて来た。この状況じゃ二人とも灰になってしまう。

圭の降臨に驚きを隠せなく、白夜は素直に綺麗な目を大きく見開いて口を半開きにしている。
そんな白夜に肩を貸し、圭は爆炎の渦の頂上を見上げて思いっきりしゃがむと、その勢いで爆炎の渦から飛び出た。
上手く着陸すると、白夜を木に寄りかかせて圭はネロを見た。
「やったな。」
圭はいつもの表情に戻り、ほぅと息をついた。圭はまださっきの感覚が体に残っているようだった。
すると白夜は、いきなり圭の前で土下座の体勢に入った。
「す、すいませんでしたっ！　……こんなに調子乗ってしまっていた自分に嫌気が差しますッ。」
「……はぃ？」
圭は眼鏡をくいっとして、瞳を大きく見開いた。さっきまでの彼とは全然違う人格が現れたのだ。
「……この白夜紺、一生貴方様に着いて行きますッ！　十代目ッ！」
「な、何でー「当たりめぇだろ。」」
圭が驚愕しているとネロが真顔で圭を見上げた。
“負けた奴が勝った奴の手下になる”……マフィア界の常識だぞ。」
圭は土下座から顔を上げた体勢になった白夜の前に座った。白夜は何故か圭を見上げてしまった。
「で、でも……！　自分はマフィアじゃないし、そんな事でー「いえ、違います…」」
白夜は俯くと、微妙な微笑みで話し始めた。
「俺は……俺は次期ボスになりたいなんて、そんな大それた事など考えてなかったんす。只十代目が本当にボスになれる人材なのか…確かめたかっただけで……。でもそんな必要ありませんでした。」
しみじみとそう言うと、白夜は圭の手を取り、瞳を輝かせて言った。
「貴方は十代目にお相応しい方だ……。敵をも助けてくれるとは、何て心の広いお方……。この白夜紺、たとえこの身が朽ち果てよう

とも、十代目である貴方をこの命をかけてお守りいたしますッ！」
圭は「は、はぁ……」と呟きながらネロに助けを求めた。
「フン、中々おもしれぇ奴だな。……こういう奴もファミリーには必要なんだぞ。」
すると、靴箱の方から山歹が走って来た。
「おぉ、ここにいたのか。今日部活無いから一緒に帰ろうぜ。……お？　転入生もいるな。何してたんだ？」
「山歹……。」
山歹は圭の肩に手を置いた。その光景を見て、白夜はむっとした。
「てめぇ……気安く十代目にさわんじゃねぇ！！」
白夜は立ち上がり、再びライターを取り出し、蓋をカチャッと開けた。
「焦げろッ！」
もう少しで爆炎が作成されるという所で圭は必死で止めた。一般人にこの事を知られちゃまずいと直感した圭は、白夜の腕を掴んだ。
「びゃ、白夜君！　落ち着いて！」
「十代目が…そう言うなら。」
白夜は笑顔でライターを閉まった。しかし、山歹の方を向くと無愛想に言った。
「今度、十代目に気安く触ったりしたら許さねぇからな。」
すると山歹は爽やかな笑顔で首を傾げた。
「十代目……？　あぁ、圭達はマフィアごっこしてんだな。面白そうだし、俺も入れてくれよ。な？」
「いやぁ、ごっこじゃないし……。」
圭が山歹の天然に呆れていると、今度はネロが山歹の頭に乗っかり、鼻で笑った。
「あぁ、勿論だ。圭のファミリーが揃うのももはや時間の問題だな。」
圭は直ぐにネロに抗議した。抗議しても無駄なのは理解済だが。
「そんな意味が分からない組織に一般人を巻き込むのは止めてよ。

……それに自分はマフィアなんかにはならないって言ってるだろ？」
「そうっすよ！　こんなヤツをファミリーに入れるのは俺も反対っす！」
白夜も圭と加勢した。しかし、ネロはわざと可愛く上目目線で圭を見た。
「だって～。ボスの命令だもん。」
圭は呆れて言葉もでない様子。白夜は「やれやれ」と良い、降参のポーズを採っていた。
「だもん…じゃないでしょ……。」
ネロは元の表情に戻ると1人で考え込んだ。
「（だが、さっき“裏ＴＩＭＥ”から元に戻る時…前やったときは気を失ったのに何故今回は平然としていたんだ？初代ボスでさえ、平然といれたのは約1年かかってからだったと言うのに。）」
ネロは白夜と山歹と戯れている圭を見てニヤッと笑んだ。
「まさかだとは思うが…お前はひょっとしてひょっとするかもな、圭。」
その日の夕日はとても綺麗だったー

標的０１　争いの真髄（後書き）

STORY　2　END

標的０２　圭の憂鬱（前書き）

STORY　3　PARRT　1

標的０２　圭の憂鬱

朝の涼しい風が窓の隙間から吹き通り、滑らかな白い肌の輪郭をなぞる。
「……」
圭はゆっくりと目を開け、ぼーっと裸眼の侭天井を見つめた。
―何故目覚ましも無しに起きたのだろう？　もっと寝ていても良い筈なのに…
そのまま上半身を起こすと、圭の視界に何かが飛び込んで来た。
「ちゃお。」
タイミングが良さ過ぎる、ネロの登場に圭は相変わらず呆れた。ワザとなのだろうか。
「今日はやけに起きんのはぇーな。」
圭の気持ちを察知したかの様な勘の良さを褒めてやるべきだろうか。
圭はボサボサの髪を適当に押さえつけながら顔を俯け、甘い吐息の様な溜息を零した。
「丁度良いな……お前の力の説明をまだしてなかったからな。この際だ、教えてやる。」
ネロは、圭の右隣にある机に飛び乗り鼻で笑った。圭はそんなネロを見ると首を少し傾げて、自分の掌を見つめた。自分の力……
「グウィードファミリーの歴代ボスは皆、独特の力を持っていたんだ。“マフィア界最強”と唱われる、伝説の能力をな。」
すると、頭の上に乗っている黒い子猫を腕で抱いた。圭は裸眼のままその行動を眺めていた。
「キングも只の黒猫じゃねぇぞ？　グウィードファミリーに代々伝わる“幻の黒猫”だ。こんな感じにオレの意のままに姿を変化させ

る事が出来んだ。すげぇだろ？」
そう言いながらネロは黒い子猫を様々な物に変化させた。銃、靴、鞄、テレビ……
圭は「は、はぁ…」と呆れながらも一応反応を見せている。
ネロはキングを、例の黒い片方しか無いグローブに変化させた。圭はそのグローブが視界に入るとハッとした。
「それ…昨日白夜君と不注意で戦った時に使った…？」
「あぁ。」
露骨にネロは返事を返した。憶えていたのか。
「自分は、自分の意思では戦ってないからね。」
ネロは思わず「ぁ？」と零してしまった。圭はそんなネロの行動を見て疑問符を飛ばした。
「（こいつ……フン、そうか。）―お前はお前の意思で戦ったんだぞ。昨日、白夜と。」
圭は「え…」と呟いた。ネロの不敵な笑みは絶える事無く圭を射抜いた。
「お前はあの時、自分を守る為に自分でどうにかしようと思った。その時オレがこのグローブをお前に使ったからお前はああなったんだぞ？」
「まぁ、完全にはお前自身がやったとは言えねぇがな」と言い、ネロは窓の枠に軽々と移動して
綺麗な青い空を見上げ、鼻で笑った。
「…つってもお前はまだマフィアの中では赤ん坊レベルだからな。これからオレがビシバシお前を教育して行くぞ。…逃げんなよ？」
圭は―逆らったら面倒な事になる―と直感し、再び甘い溜息を零した。
するとネロは勢い良く圭の頭に足蹴りをかました。圭はその攻撃に驚き、攻撃を食らった場所を痛そうに擦った。
「痛……！―「ボーッとすんな、圭！」」
ネロの方を見ると、何故か機嫌が良さそうにニヤ付いて部屋のドア

を開けていた。
「遅刻しても知らねぇぞ？」
そう言うとネロは部屋を出て行った。圭は首を傾げて、ネロの言葉の意味を考えてみた。
「遅刻って……ぁあ！？」
偶々視界に時計が入ったのに気付き、見てみた。すると既に家を出なくては行けない時間をとっくに過ぎていた。
「ち、遅刻だぁぁ！」
圭は急いで仮の制服を着て、眼鏡をかけて、髪を整えずに部屋を出た。

今日もいつもの様に平和に…

しかし、その圭の儚い願いは聞き届けられなかった―

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0524e/

Black Rose -黒の継承者-

2010年10月10日15時07分発行